

ミツカン水の文化センター

第26回（令和二年度）定点調査

「水にかかわる生活意識調査」結果レポート

脱プラスチック問題を背景に、「ペットボトル入りの水」に関する意識を新規調査

【調査期間：2020年6月4日(木)～9日(火)／対象エリア：東京圏・大阪圏・中京圏】

ミツカン水の文化センター（東京都中央区新川1-22-15茅場町中埜ビル 株式会社Mizkan Partners 広報部内）では、令和二年6月に、東京圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）、大阪圏（大阪・兵庫・京都）、中京圏（愛知・三重・岐阜）の在住者1,500名を対象とした「水にかかわる生活意識調査」を実施し、このほど集計結果をまとめました。

本調査は、1995年（平成7年）に第1回目を実施して以来、26回目となり、日常生活と水とのかかわりや意識、水と文化などについてアンケート形式で調べるという手法により、ほぼ同じ内容で毎年6月に行っている定点調査です。今回は、世界的な脱プラスチックの流れがある中で、今後飲料水への意識がどう変わっていくのかを探るためのテーマとして「ペットボトル入りの水」に関する意識・実態調査を新たに実施したほか、日本と海外における水の使用量や水道料金の比較を行いました。また、当センターのアドバイザーであり、東京大学 大学院工学系研究科 教授の沖 大幹先生に、調査結果の解説をいただきました。

【今回の調査データおよび過去（第1回～25回）の集計概要は、別途HPで紹介しています。】

《調査結果》

【1】「ペットボトル入りの水」に関する意識・実態調査

- …市販のペットボトル入りの水を“ほとんど飲まない”人が4割超
- …飲む頻度の増減傾向は、飲む人と飲まない人で二極化？
- …市販のペットボトル入りの水をよく飲む人は、水道水への評価が低い

【2】コロナ禍で家庭における水の使用量が増加？

- ステイホームに加え、衛生面への配慮なども影響か
- …「直近2か月で、家庭で1日に使う水の量は増えたと思うか？」に対し、増えたと思っている人が過半数を超える結果に

【3】3人に1人以上が災害時の水の備えをしていない！

- …「災害時に対し、普段どのような水の備えをしているか？」に対し、近年減少傾向だった「何もしていない」の数値が再び増加

〔解説〕 Oki's View

- …沖大幹先生による解説

◎コラム「世界の水事情」

- <1> 日本と海外における水の使用量
- <2> 日本と海外の水道料金比較

〔この件に関するお問い合わせ先〕

ミツカン水の文化センター 久保田、青木

〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15茅場町中埜ビル 株式会社Mizkan Partners 広報部内
TEL.03-3555-2607 FAX.03-3297-8578 <http://www.mizu.gr.jp>

《結果の抜粋と掲載ページ》

■ 調査概要	2ページ
■ 【新規調査】「ペットボトル入りの水」に関する意識…トピック【1】	
◇市販のペットボトル入りの水を飲む場面は4割超が「家にいるとき」	3ページ
◇市販のペットボトル入りの水の使い方で飲用目的以外に多いのは「災害時の備蓄用」	3ページ
◇飲む頻度は月1回より少ない“ほとんど飲まない人”が4割超	4ページ
◇飲む頻度の増減傾向は飲む人と飲まない人で二極化？	4ページ
◇市販のペットボトル入りの水のイメージはポジティブな項目が上位	4ページ
◇市販のペットボトル入りの水をよく飲む人は水道水への評価が低い	5ページ
■ 日常の水意識	
◇1日に使っていると思う水の量“200リットル以下”の回答者約8割	5ページ
◇直近2か月の家庭における水の使用量が増えたと思っている人が過半数…トピック【2】	6ページ
◎沖大幹先生による解説～Oki's View～ ①	6ページ
◇水のありがたさを感じるとき「手洗い・うがいなど」約3割	7ページ
◇節水を意識している人、実施している人ともに約7割	7ページ
■ 水道水に関する意識	
◇全体、居住地別ともに10点満点評価の平均点アップ	7ページ
◇水道水への不満の全体1位「特に不満なし」	8ページ
■ 水と災害	
◇日頃不安や心配に感じていること「給水制限や断水」「水難被害」「浸水被害」が増加	8ページ
◎沖大幹先生による解説～Oki's View～ ②	9ページ
◇不安に感じる災害上位項目変化なしも「ゲリラ豪雨」の数値減少	10ページ
◇災害時の水の備え「何もしていない」人が再び増加…トピック【3】	10ページ
◇市販のペットボトル入りの水の買い置き量「1週間」分以上が増加傾向	11ページ
◎沖大幹先生による解説～Oki's View～ ③	11ページ
■ 水と生活・文化	
◇「水の日」の認知上がらず	12ページ
■ コラム「世界の水事情」	
<1> 日本と海外における水の使用量	12ページ
<2> 日本と海外の水道料金比較	13ページ

【調査概要】

第26回（令和二年度）「水にかかわる生活意識調査」

- ◆調査対象数 : 1,500票
- ◆調査対象者 : 東京圏(東京、神奈川、埼玉、千葉)、大阪圏(大阪、兵庫、京都)、中京圏(愛知、三重、岐阜)に居住する20歳代から60歳代の男女
- ◆調査方法 : インターネット調査
- ◆調査期間 : 令和二年6月4日(木)～6月9日(火)
- ◆回収数(人) :

	東京圏		大阪圏		中京圏		合計		小計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
20代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
30代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
40代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
50代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
60代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
合計	250	250	250	250	250	250	750	750	1,500
	500		500		500				

【新規調査】「ペットボトル入りの水」に関する意識

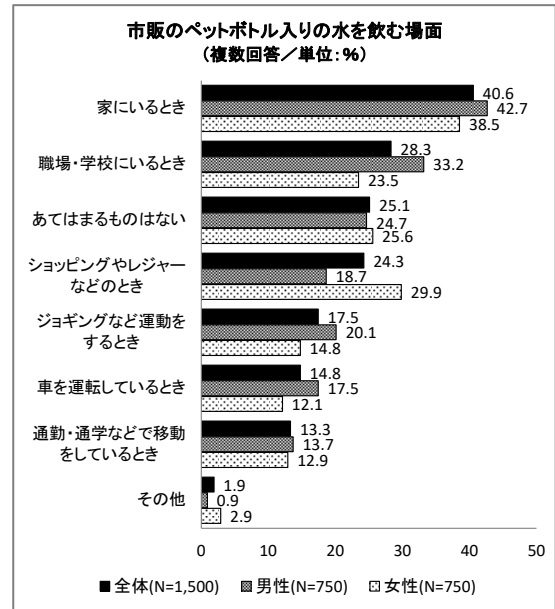
軽くて丈夫なプラスチックは、その汎用性と利便性の高さから幅広い分野で使われ、今では私たちの暮らしに欠かせない存在となっています。その一方で、過剰な使用による処理問題や海洋プラスチックごみ問題などの課題もあり、日本でもその課題への取り組みの一步として、今年7月1日からレジ袋有料化がスタートしました。そこで今回、世界的な脱プラスチックの流れがある中で、今後、飲料水への意識がどのように変わっていくのかを継続的にみていく趣旨で、水とプラスチックの関わりの象徴ともいえる「ペットボトル入りの水」に焦点をあてた意識・実態調査を行いました。

Q.市販のペットボトル入りの水を飲む場面は？ (6択+その他+あてはまるものはない)

◇4割超が「家にいるとき」に飲んでいる。

市販のペットボトル入りの水を飲む場面は、「家にいるとき」が全体の4割を超える回答（40.6%）で最も多く、「職場・学校にいるとき」（28.3%）、「ショッピングやレジャーなどのとき」（24.3%）と続きました。

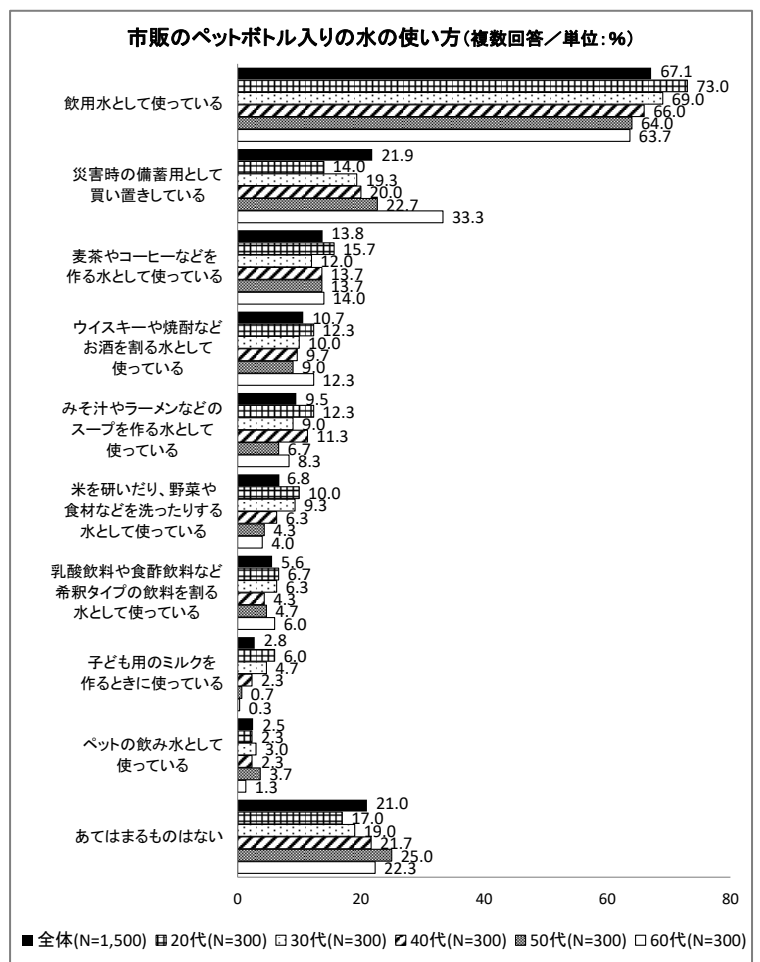
性別で見ると、トップはいずれも「家にいるとき」でしたが、男性は「職場・学校にいるとき」が33.2%で2位（女性は23.5%で4位）だったのに対し、女性は「ショッピングやレジャーなどのとき」が29.9%で2位（男性は18.7%で5位）と、男女の違いが見られました。



Q.市販のペットボトル入りの水の使い方は？ (9択+あてはまるものはない)

◇飲用目的以外で多かったのは「災害時の備蓄用として」。

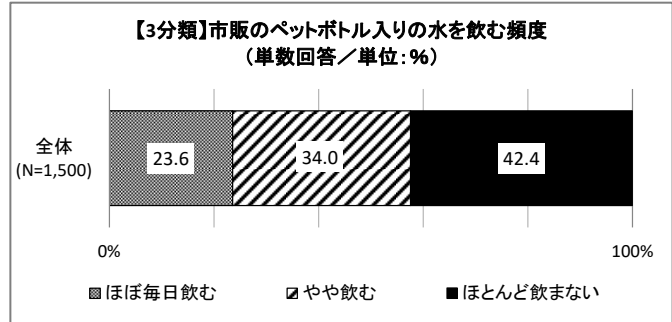
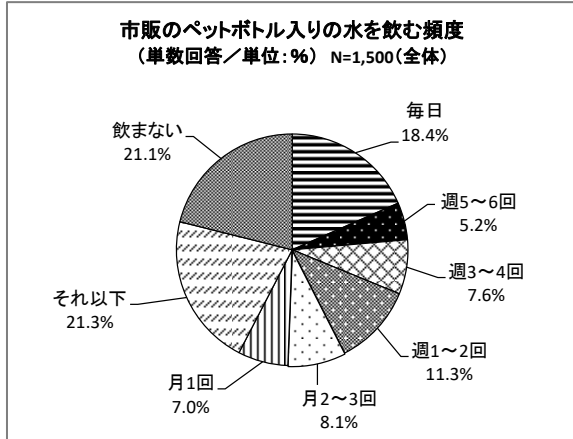
市販のペットボトル入りの水の利用方法について、ボトルのサイズや使う場所を限定せずに聞いたところ、「飲用として」が全体の67.1%で断然の1位。飲用目的以外では、「災害時の備蓄用として」が21.9%となり、「麦茶やコーヒーなどを作る水として」（13.8%）や「ウイスキーや焼酎などお酒を割る水として」（10.7%）、「みそ汁やラーメンなどのスープを作る水として」（9.5%）といった調理関連の項目を上回りました。中でも60代は、「災害時の備蓄用として」が33.3%と他の年代より高く、10~20ポイント程度の差がありました。



Q.市販のペットボトル入りの水を飲む頻度は？（7択+飲まない）

◇月1回より少ない“ほとんど飲まない人”が4割超。

普段、市販のペットボトル入りの水を飲む頻度は、「毎日」が18.4%、「週5～6回」が5.2%、「週3～4回」が7.6%、「週1～2回」が11.3%、「月2～3回」が8.1%、「月1回」が7.0%、「それ以下」が21.3%、「飲まない」が21.1%となり、これを週5回以上の“ほぼ毎日飲む人”、週4回～月1回の“やや飲む人”、月1回より少ない“ほとんど飲まない人”に3分類すると、それぞれ23.6%、34.0%、42.4%でした。



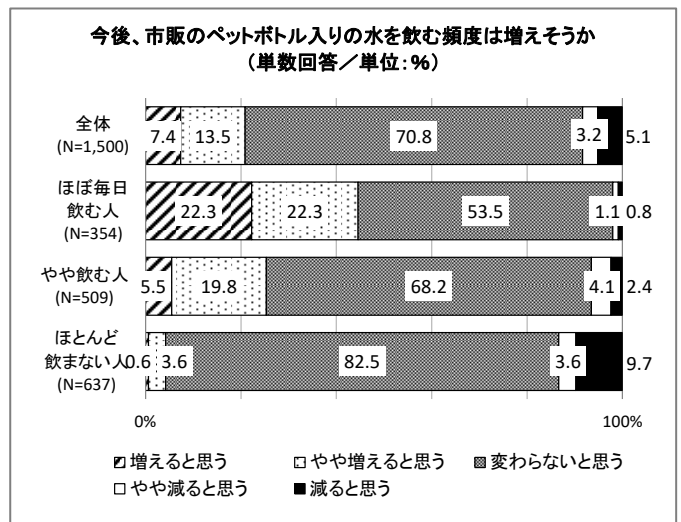
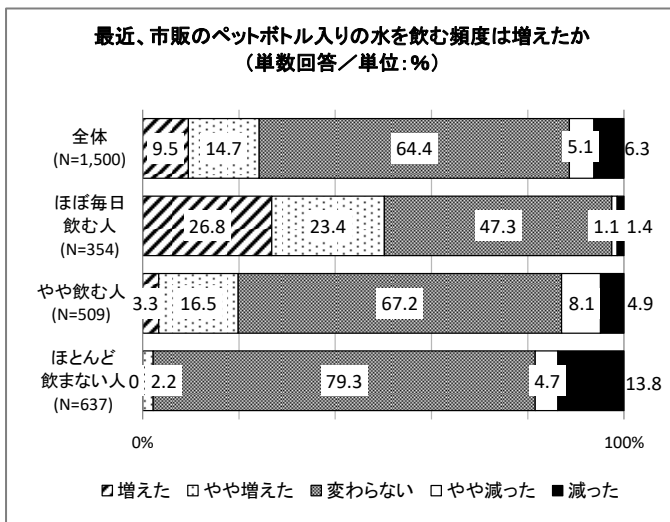
Q.最近、飲む頻度は増えたか？（5択）

Q.今後、飲む機会が増えると思うか？（5択）

◇増減傾向が飲む人と飲まない人で二極化？

市販のペットボトル入りの水を飲む頻度が最近増えたかを聞いたところ、全体では「増えた」が9.5%、「やや増えた」が14.7%、「変わらない」が64.4%、「やや減った」が5.1%、「減った」が6.3%でした。これを上記「普段の飲む頻度」の3分類別に見てみると、“ほぼ毎日飲む人”は「増えた」が26.8%、「減った」が1.4%だったのに対し、“ほとんど飲まない人”は、「増えた」が0%、「減った」が13.8%と、両者に差異が見られました。

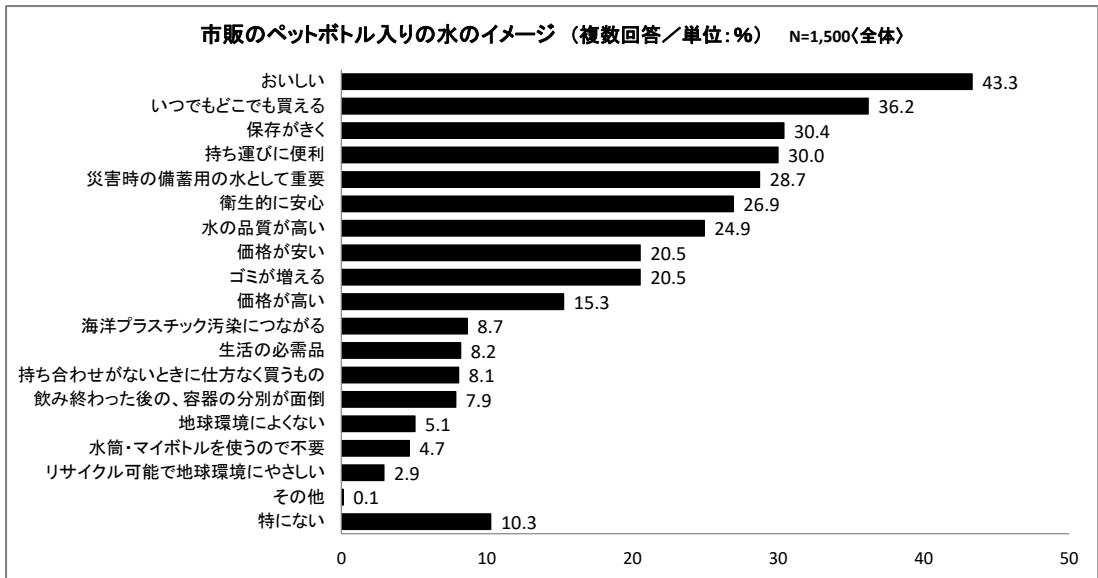
また、今後飲む機会が増えると思うかを聞いた設問でも、“ほぼ毎日飲む人”は「増えると思う」が22.3%、「減ると思う」が0.8%、“ほとんど飲まない人”はそれぞれ0.6%、9.7%と同様の差異が見られ、飲む人と飲まない人による傾向の二極化をうかがわせる結果となりました。



Q.市販のペットボトル入りの水のイメージは？（17択+その他+特にない）

◇おいしさ、利便性や保存性の良さなどポジティブなイメージが上位。

市販のペットボトル入りの水のイメージは、全体の1位が「おいしい」（43.3%）、2位「いつでもどこでも買える」（36.2%）、3位「保存がきく」（30.4%）、4位「持ち運びに便利」（30.0%）、5位「災害時の備蓄用として重要」（28.7%）と、いずれもポジティブなイメージが上位を占め、「ゴミが増える」（20.5%）、「価格が高い」（15.3%）、「海洋プラスチック汚染につながる」（8.7%）、「容器の分別が面倒」（7.9%）などのネガティブイメージは下位に留まりました。今後、これらの数値がどのように変化していくのか注目したいところです。



Q.飲む頻度別の飲用としての水道水10点満点評価は？ (0~10の整数を自由回答)

◇市販のペットボトル入りの水をよく飲む人は、水道水への評価が低い。

「市販のペットボトル入りの水」飲む頻度別

2013年より継続的に調査している「飲用としての水道水10点満点評価」を、市販のペットボトル入りの水を飲む頻度(3分類)別に見たところ、「ほぼ毎日飲む人」の平均は5.97点、「やや飲む人」は6.52点、「ほとんど飲まない人」は6.95点と、市販のペットボトル入りの水を飲む頻度が高い人の水道水評価の平均点が低く、「ほぼ毎日飲む人」と「やや飲む人」の点数は、全体の平均6.57点を下回りました。市販のペットボトル入りの水を飲む頻度と飲用水としての水道水評価の相関などを含め、今後の動向が気になるところです。

水道水10点評価(平均点)

ほぼ毎日飲む人 (N=354)	5.97
やや飲む人 (N=509)	6.52
ほとんど飲まない人 (N=637)	6.95
全体 (N=1,500)	6.57

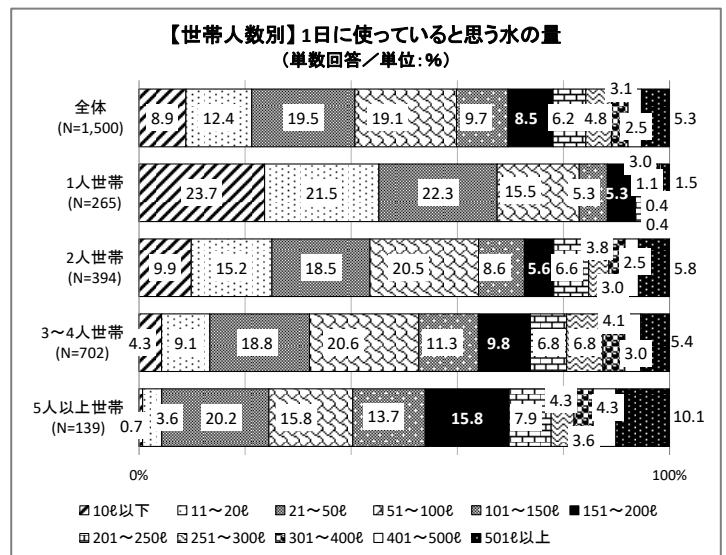
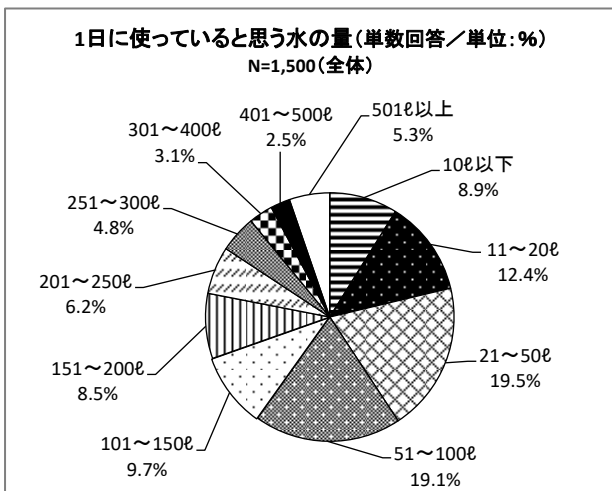
※全般的な水道水の10点満点評価は7頁参照

日常の水意識

Q.家で1日に使っていると思う水の量は？ (11択)

◇“200リットル以下”の回答者が約8割。

家庭において、自身が1日に使っている水の量はどれくらいだと思うかを聞いたところ、「21~50リットル」(19.5%)が最も多く、「51~100リットル」(19.1%)、「11~20リットル」(12.4%)、「101~150リットル」(9.7%)、「10リットル以下」(8.9%)、「151~200リットル」(8.5%)と続き、これらを合計した“200リットル以下”の回答者が全体の約8割(78.1%)を占めました。東京都の家庭で、1人1日あたりの水使用量の平均とされる約220リットルが含まれる「201~250リットル」を回答した人は、6.2%に留まりました。

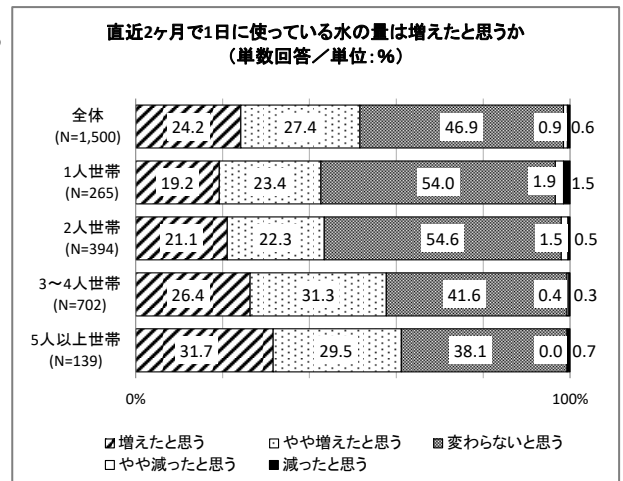


Q.直近2か月で、家庭で1日に使っている水の量は増えたと思うか？（5択）

◇増えたと思っている人が過半数を超える結果に。

コロナ禍によるステイホームに加え、衛生面への配慮なども影響？

本調査（6月上旬実施）の直近2か月で、使っている水の量は増えたと思うかを聞いたところ、「増えたと思う」（24.2%）と「やや増えたと思う」（27.4%）を合わせ、全体で半数以上の人が増えているという意識を持っていることがわかりました。これは、学校の一斉休校やテレワークなどにより、在宅時間が増えたことが大きな要因として考えられるのはもちろんのこと、手を洗う回数の増加など衛生面への配慮意識も少なからず影響しているのかもしれませんが、また、世帯人数に着目してみると、増えたと思っている人（「増えた」+「やや増えた」）の割合は、1人世帯で42.6%、2人世帯で43.4%、3～4人世帯で57.7%、5人以上の世帯で61.2%と、世帯人数が多い人ほど高くなる傾向が見られました。



沖大幹先生による解説 ～Okī's View～ ①

【家庭での水の使用量】

皆様のご家庭では一日何リットルの水を使っているだろうか。

ここ数年恒例の質問である。回答では21 L～50 Lが僅差で51 L～100 Lを抜いて一位。質問からは家族全体でなのか、1人あたりなのかは不明だが、1人暮らしとしても、50 L以内に抑えるにはシャワーもたまにしか浴びず、洗濯や炊事なんでももちろんせずに、必要最小限のトイレと洗面だけ、といった暮らしをしないと難しいだろう。なんせ、シャワー1分で10 Lくらい、節水シャワーでも1分あたり6～7 Lである。トイレも最新型でない限り、1回流すごとに6 Lは使ってしまう。

細かく見ると、5人以上世帯でも一番多いのは21～50 Lであるが、1人世帯に比べるとたくさん使っていると答える方もいて10.1%の方々が50 L以上と回答している。

東京都水道局平成30年度生活用水実態調査によると、世帯人員ごとの1日1人あたりの使用量は次の通りとなっている。

世帯人員	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上
世帯あたり使用水量(L/日)	273	530	690	837	917	1,117
1人あたり使用水量(L/日)	273	265	230	209	183	186

(東京都水道局平成30年度生活用水実態調査)

もちろん、平均以上の方も平均以下の方もいらっしゃるだろうが、1日に50 Lといったことはなさそうだ、ということがわかるだろう。ほとんどの方がどのくらいの量を使っているかまったく気にしていない、ということだろうが、それはそれで水へのアクセスをまったく心配なくてよい、幸せな日本の暮らしの反映なのだろう。

さて、ここで個人情報ばらしてしまうと、4人世帯の我が家の使用水量は昨年1年間の平均で1日約570 L、1人あたり約143 Lで東京都の調査結果よりはだいぶ少なかった。

ところが、今年の3月中旬から5月上旬の2か月の使用量は、昨年に比べて平均1日あたり48 L、1人あたり12 L多かったのである。これは昨年6回の検針ごとのばらつきと平均に基づいて計算すると偏差値にして75を越え、断トツに多い。

なぜこんな事態になったかを考えてみると、ちょうどこの時期、新型コロナウイルス感染症の影響で学校も急遽自宅待機となり、テレワークが始まって、家族4人が“Stay Home”していた時期に重なる。1人1日12 Lというと、トイレに行く回数が2回増えればちょうどそんな値に相当する。昼食も家で食べるようになるので、その分も考慮すると、もっと増えていてもおかしくはないが、外出して帰宅後手を洗う水量は減ったかもしれない。洗濯物の量も減ったので、それに応じて必要な水量も多少は減った可能性がある。

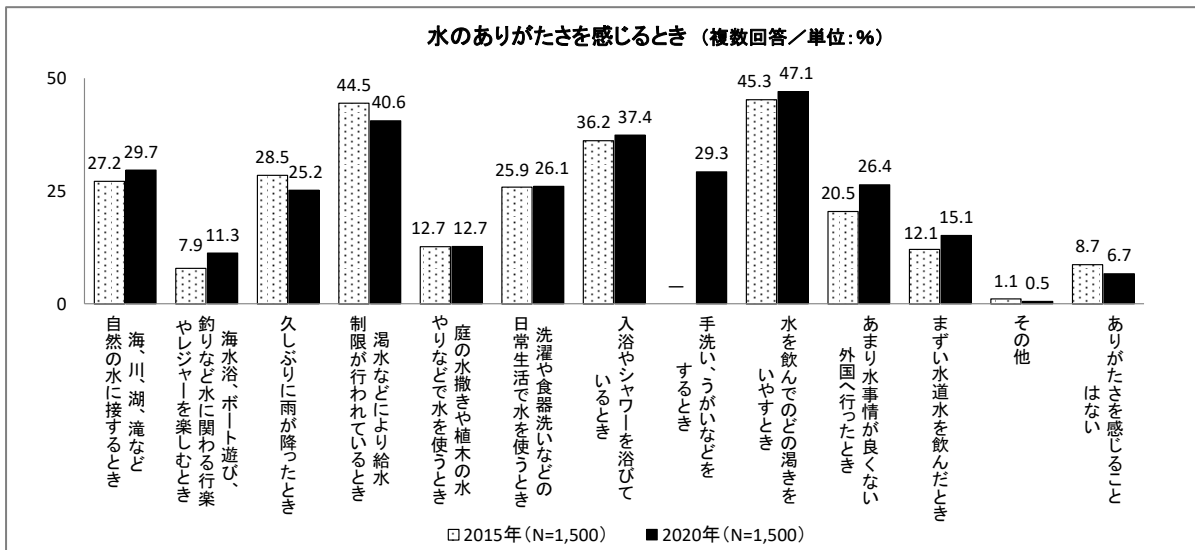
そんなことを気にするのはうちくらいかと思っていたら、アンケートを取った6月はじめからの直近2ヶ月で増えたかどうかを尋ねた設問に対して、増えたと思うと答えた方24.2%、やや増えたと思う方27.4%で、合わせて51.6%が増えたと感じていて、変わらないと思う方46.9%を上回っている。減ったと思う方は「やや」も含めて1.5%で、ほとんどいない、というのも興味深い。

東京の場合には1日50 Lは2ヶ月の水道料金にして千円にも満たない。しかし、水道への不満(8頁)として「水道料金が低い」をあげている方が毎年全体の1/3くらいいることから考えると、たとえ数百円の差だとしても、水道料金のお知らせは案外多くの人が見ていて、支払い料金が増えているのに気付いたのかもしれない。水の使用量の回答がずいぶん実態と違うことから、多くの皆さんは水道の使用量にはあまり関心がないが、料金に対しては真剣に注意を払っているということだろう。

Q.水のありがたさを感じる時は？（11択+その他+感じることはない）

◇「手洗い・うがいなどをするとき」は約3割。

水のありがたさについて、今回新たに「手洗い・うがいなどをするとき」の選択肢を加え、2015年以来の調査を行ったところ、1位「水を飲んでのどの渇きをいやすとき」（47.1%）、2位「喝水などにより給水制限が行われているとき」（40.6%）、3位「入浴やシャワーを浴びているとき」（37.4%）、4位「海、川、湖、滝など自然の水に接するとき」（29.7%）、5位「手洗い・うがいなどをするとき」（29.3%）となりました。約3割の回答があった「手洗い・うがいなどをするとき」については、この数値がコロナ禍でありがたさを実感したことによるものなのかを推察するには、継続的な調査で推移を注視する必要がありそうです。



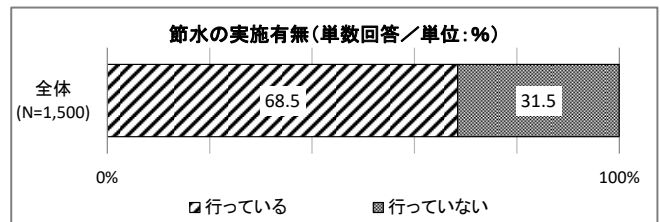
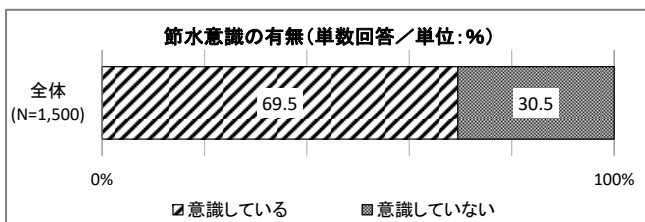
Q.節水を意識しているか？（2択）

Q.節水を実施しているか？（2択）

◇意識と行動、ともに7割近くの人が「している」。

節水調査については、生活者における節水への意識と行動の明確化を目的に、昨年より新たな設問で調査を開始しました。まず、節水を意識しているかについては、全体の7割近く（69.5%）が「意識している」と回答し、昨年（67.6%）とほぼ同様の結果でした。

節水の実施有無については、「行っている」に約7割（68.5%）の回答があり、こちらも昨年（66.7%）からの大きな増減はありませんでした。

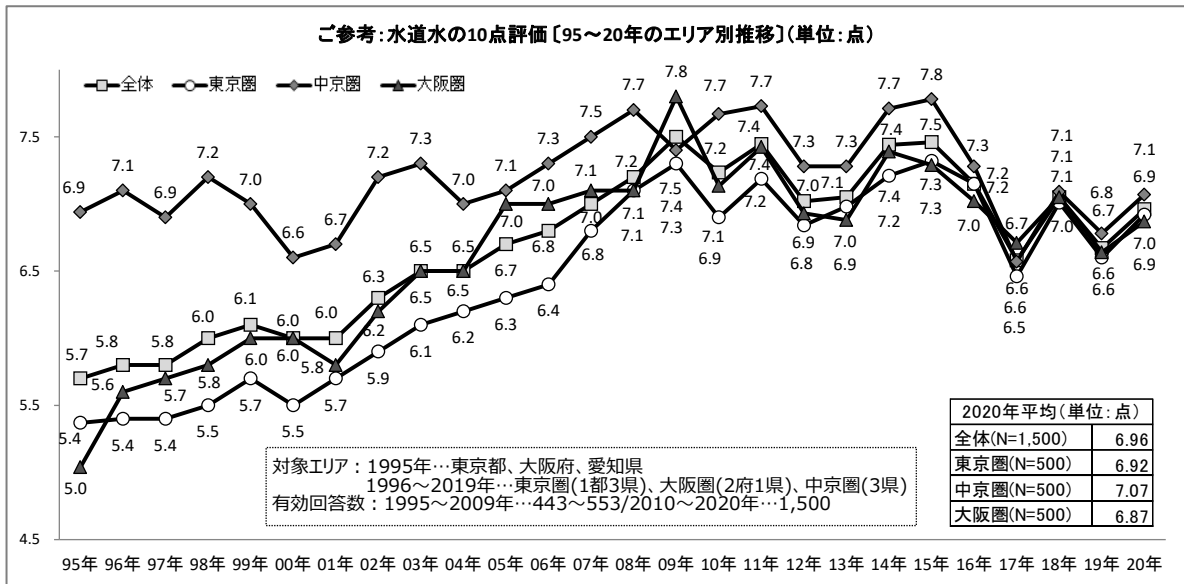


水道水に関する意識

Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

◇全体、居住地別ともに平均点アップ。中京圏は再び7点台に。

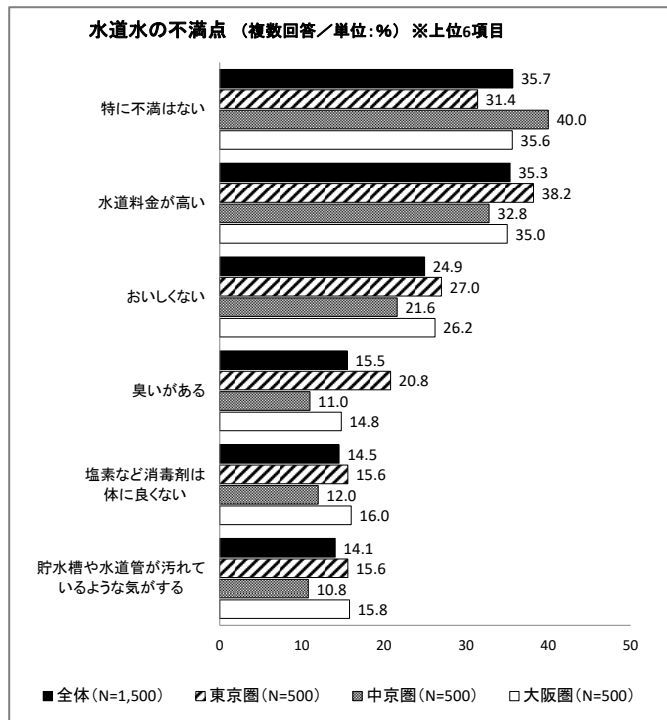
水道水の10点満点評価は、一昨年に全体の平均点が7点台を回復したものの、昨年は6.67点に低下しました。今年の結果は、全体の平均が0.29ポイント増の6.96点となり、居住地別でも東京圏が0.32ポイント増の6.92点、中京圏が0.29ポイント増の7.07点、大阪圏が0.23ポイント増の6.87点と、いずれも上昇しました。



Q.水道水について不満を感じていることは？ (8択+その他+特に不満はない)

◇**全体の1位は「特に不満なし」。**東京圏では「水道料金」がトップ。

水道水への不満については、「特に不満はない」(35.7%)が全体の1位となり、昨年トップだった「水道料金が高い」(35.3%)と順位が逆転。以下、3位「おいしくない」(24.9%)、4位「臭いがある」(15.5%)、5位「塩素など消毒剤は体に良くない」(14.5%)と続きました。また、居住地別では、中京圏・大阪圏は「特に不満はない」がそれぞれ40.0%・35.6%で全体と同様1位でしたが、東京圏は「水道料金が高い」(38.2%)が「特に不満はない」(31.4%)を上回りトップでした。



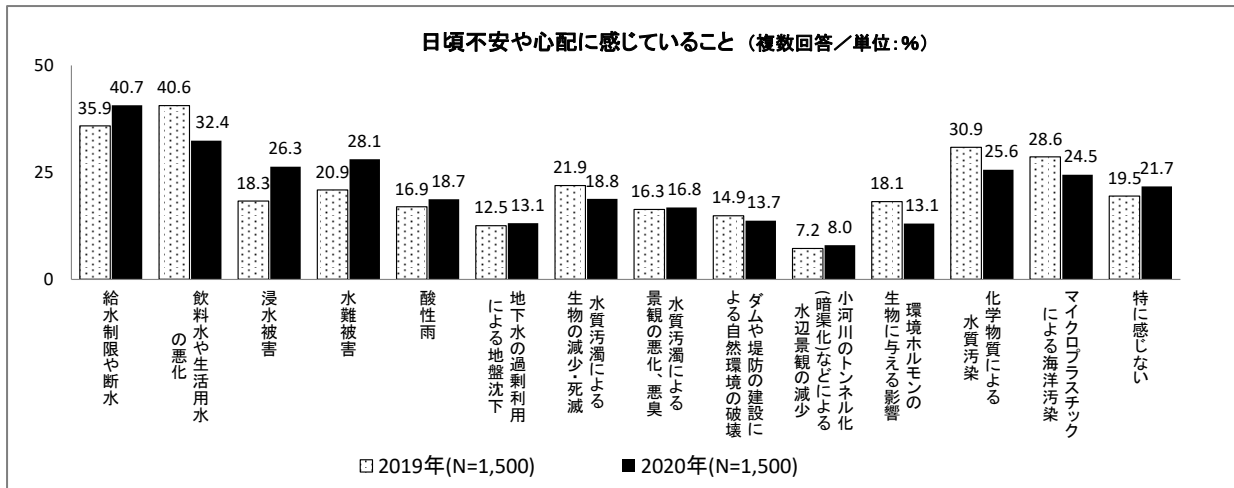
水と災害

Q.日頃不安や心配に感じていることは？ (13択+特にない)

◇「給水制限や断水」「水難被害」「浸水被害」が増加。

日頃不安や心配に感じている事柄について、昨年と同様の項目を提示して聞いたところ、1位「給水制限や断水」(40.7%)、2位「飲料水や生活用水の悪化」(32.4%)、3位「水難被害」(28.1%)、4位「浸水被害」(26.3%)、5位「化学物質による水質汚染」(25.6%)で、昨年5位だった「マイクロプラスチックによる海洋汚染」(24.5%)が6位でした。

昨年と比較すると、「給水制限や断水」「水難被害」「浸水被害」が増加している一方で、「飲料水や生活用水の悪化」「化学物質による水質汚染」「マイクロプラスチックによる海洋汚染」といった、主に環境問題にかかわる項目の数値は減少しました。



沖大幹先生による解説 ～Oki's View～ ②

【水への危機感とプラスチックごみへの関心】

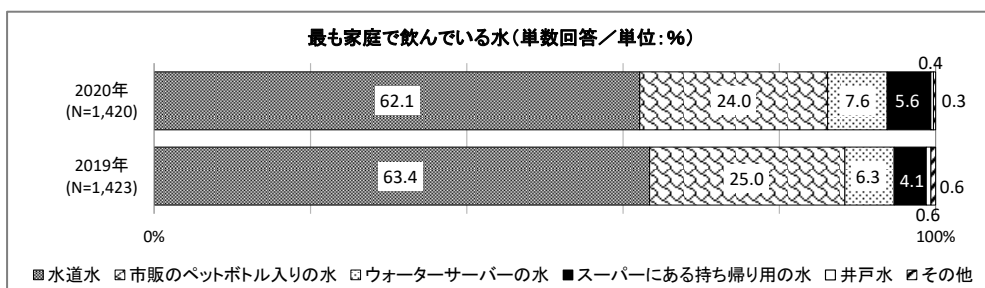
上記のグラフでは、「日頃不安や心配に感じていること」に対する複数回答の結果が示されている。「給水制限や断水」が1位で、これはやはりCOVID-19の影響で、社会不安が増大していた現れであろう。一部の給水事業者で感染が確認されて事業継続にあたって周辺事業者から支援を仰いだ、という話や、多くの給水事業者が、現場従事者を複数のチームに分け、いずれかのチームで感染者が出ても安定した供給が継続できるように、という臨時体制を取った、という話は知らずとも、危機になると普段当たり前にも使えんと思っているインフラが突然使えなくなるのではないかと気になる方が多いということだろう。あるいは、単に、COVID-19で家に帰ったら手を洗い、うがいをするのに水が使えなかつたら困る、という切迫感からかもしれない。

順位的には3位、4位であるが、水難事故や浸水被害も前回に比べるとぐっと回答数が増えている。水難事故というと、毎年8月を中心として川や海で亡くなる方が年間700～800人と圧倒的に多いのだが、ここでは豪雨に伴う洪水時の被災を想定した回答が多かったのではないだろうか。昨年10月の令和元年東日本台風(台風第19号)による死者は84名で、自宅で亡くなった34名のうち、27名が65歳以上の高齢者であり、屋外で亡くなった50名のうち、車による移動中の被災が27名と、危険が身近に感じられる災害の記憶が鮮明だったに違いない。また、台風が東日本を縦断したのが土曜日から日曜日にかけてであり、公共交通機関も止まり、災害対応の番組編成となったテレビの報道ニュースをずっと自宅で眺めているしかなかった、という方も多く、なおさら水害の危機が印象に残っているのであろう。

これに対して、化学物質による水質汚染やマイクロプラスチックによる海洋汚染を心配に感じていると答えた方は減っている。地域的には中京地区ではあまり減っていないのに対して、化学物質による水質汚染を心配に感じている方は大阪(昨年比9.2ポイント減)で、マイクロプラスチックによる海洋汚染は東京(昨年比6.6ポイント減)で特に減り方が激しい。COVID-19関連のニュースばかりとなり、いわゆる身近な環境問題がメディアを通じて取り上げられる機会が減ったのに対応して関心が薄れたのかもしれない。しかし、欧米各国のみならず、途上国でも小売店でのプラスチックバッグの提供がとくに有償化されていたのに、日本でもこの7月からようやくレジ袋の有料化が始まる、というタイミングで、市民の関心が下がっている、というのはやや頼りない。

一方で、最も家庭で飲んでいる水に関する質問では市販のペットボトル入りの水の割合が減って、ウォーターサーバーや持ち帰りの水が増えている(下図)。レジ袋と並んでプラスチックゴミの象徴であるペットボトルを嫌い、容器がリユースされるウォーターサーバーや持ち帰り水の利用が増えているのは、コスト的な側面だけではなく、やはりプラスチックごみに対する意識の高い方も少なくない、という現れであろう。

マイクロプラスチックが選択肢に入ったのは昨年からであるが、来年以降どうなるか、注目される。



Q.不安に感じている災害は？（24択+その他+特に不安を感じたことはない）

◇上位3項目に変化なしも「ゲリラ豪雨」は減少。

東京圏では「断水」の増加目立つ。

不安に感じている災害は、1位「台風」（65.5%）、2位「地震」（60.5%）、3位「ゲリラ豪雨」（42.3%）と、トップ3の順位に変化はありませんでしたが、その中で「ゲリラ豪雨」の数値が昨年から10.0ポイント減少。特に大阪圏は昨年比マイナス12.8ポイントと、他のエリアに比べ大きく減少しました。また、東京圏では「断水」（昨年比9.4ポイント増）、中京圏では「火災」（昨年比8.0ポイント増）の増加が、他のエリアとの比較で目立ちました。

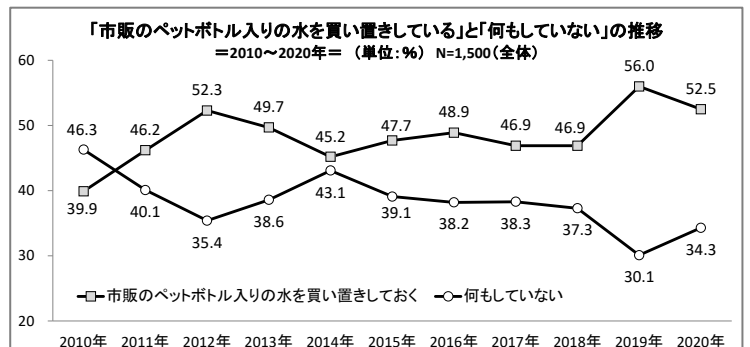
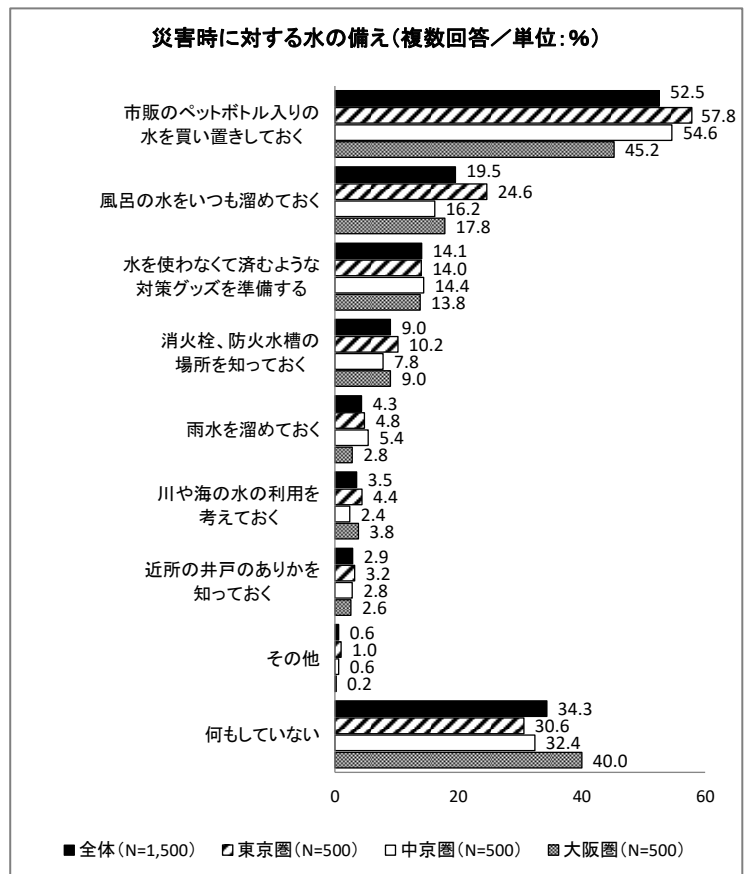
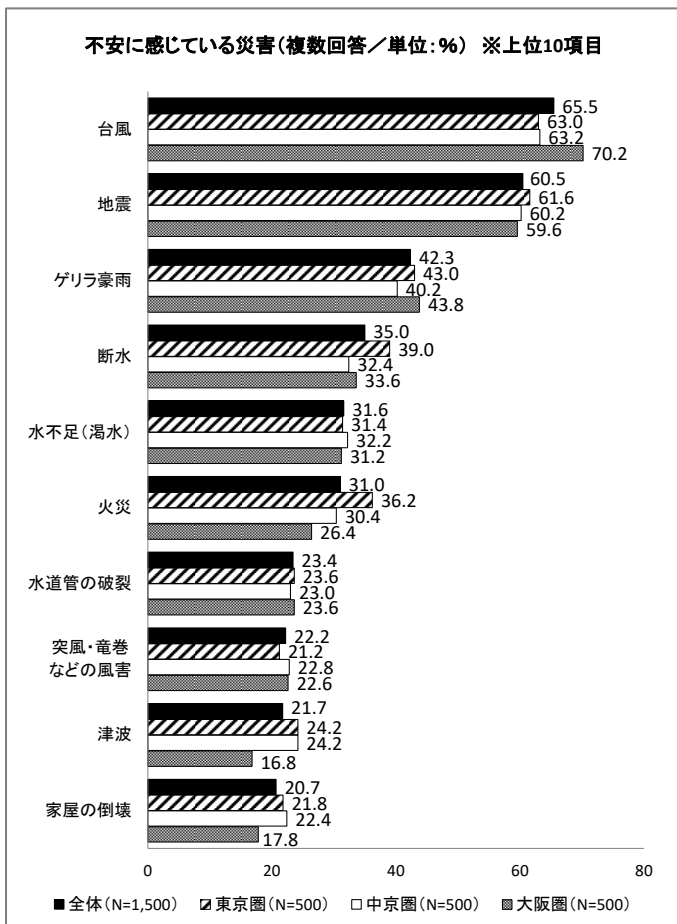
Q.災害時に対する水の備えは？（7択+その他+何もしていない）

◇減少傾向だった「何もしていない」人が再び増加。

「ペットボトル入りの水を買って置く」人は減少。

「災害時に対する水の備え」は、2014年を起点に「何もしていない」が減少傾向にあり、昨年3割（30.1%）にまで減少しましたが、今年は34.3%と再び増加しました。さらに、備えの項目で1位の「市販のペットボトル入りの水を買って置く」は、2014年から比較的增加傾向で、昨年は過去10年で最多の56.0%でしたが、今年は昨年比3.5ポイント減の52.5%となりました。

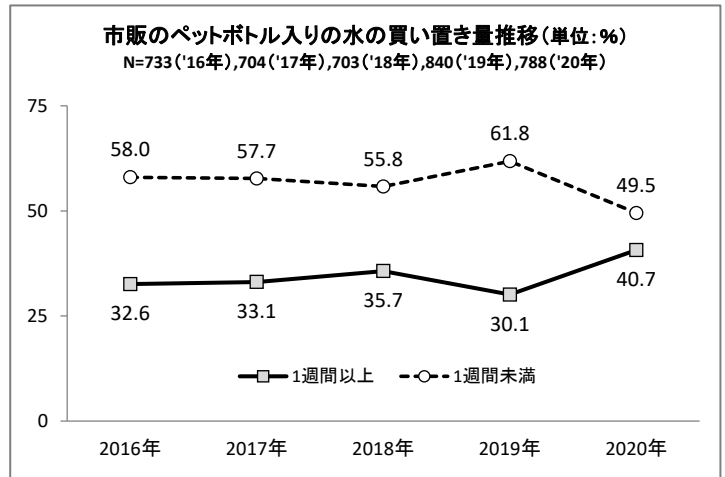
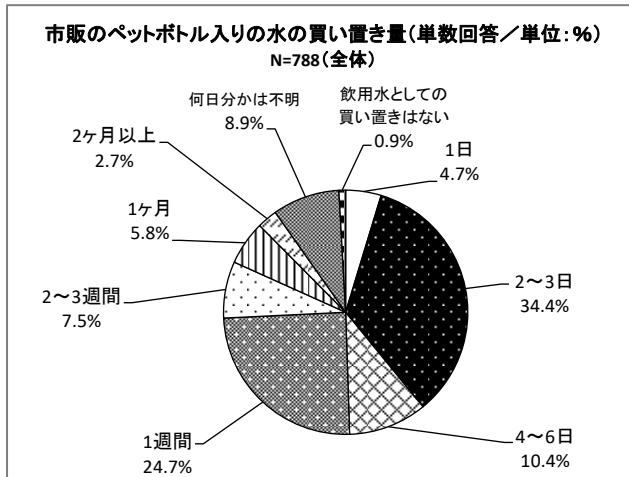
居住地別では、大阪圏の「市販のペットボトル入りの水を買って置く」が昨年比10.8ポイント減で5割を切るまで減少し、昨年3割を切った「何もしていない」は4割まで増加しました。



Q.市販のペットボトル入りの水の買い置き量は？（9択）

◇この5年で「1週間」分以上が増加傾向。

前項「災害時に対する水の備え」の設問で「市販のペットボトル入りの水を買置き」を選択した回答者に対し、実際の買い置き量（飲用水の備えとして）を聞いたところ、最も多かったのは「2～3日」（34.4%）で、「1週間」（24.7%）、「4～6日」（10.4%）と続きました。また、「1日」「2～3日」「4～6日」を合わせた“1週間未満”の人は49.5%と昨年から12.3ポイント減少し、「1週間」「2～3週間」「1ヶ月」「2ヶ月以上」を合わせた“1週間以上”の人は10.6ポイント増の40.7%でした。“1週間以上”の人は、昨年減少したものの、本調査を開始した2016年以降の5年間で増加の傾向にあり、今回初めて4割を超えました。



沖大幹先生による解説 ～Okī's View～ ③

【不安に感じている災害と水の備蓄】

不安に感じている災害(10頁)で東京が台風に対する回答率を大きく上げたのに対し、中京や大阪では下がっており、災害を経験したかどうかで「日頃不安や心配に感じていること」の設問のように印象が大きく変わることを裏付けている。地域を問わずゲリラ豪雨に対する不安が10ポイント程度減っているのは、大水害の陰であまり報道されなくなり、さらには、ゲリラ豪雨の報道にも慣れてきた、というのが理由かと推察される。

地震や断水に対する不安も東京や中京では上がっており、災害時の備えも充実したかと思ったら、「災害時の水の備え」で何もしていないが全体的に増えている。1位は相変わらず「ペットボトル入りの水を買置き」であるが、東京では若干上がっているものの、大阪では10ポイント以上下がっている。大阪で水供給の安定性が喧伝されて多くの住民の方々が安心した結果なのか、はたまた、吉村大阪府知事のCOVID-19対策のリーダーシップで住民の皆さんの行政全般に対する信頼が上がった結果なのかはわからないが、災害への水の備えは不要だ、と思った方が大阪では増えた模様である。

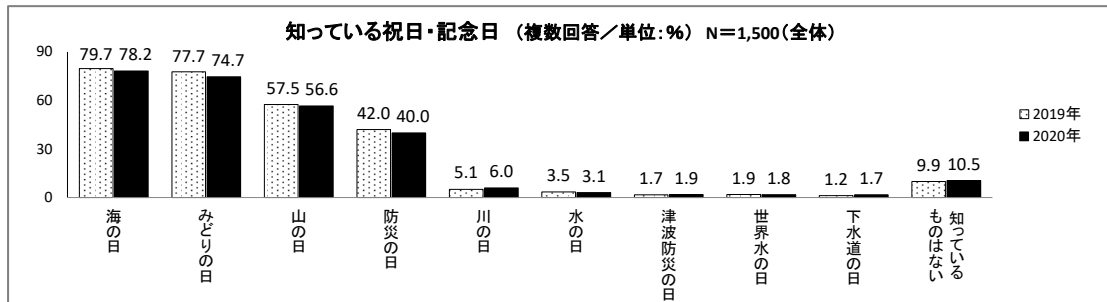
しかしながら、ペットボトル入りの水の買い置き量では、1週間未満の備蓄量の方が減って、1週間以上の方が相対的に増え、1カ月以上、2カ月以上の方は全体に対する割合は多くないものの、それぞれ前回に比べて倍増している。COVID-19のような非常事態に対しては、私たちは何か対策をせざるにはられない。市民レベルでできる労力のひとつがマスクやトイレトペーパーの買い溜めであり、それらに引きつけられるようにして水の備蓄を増強した方も少なからずいらした、ということなのではないだろうか。

割合が減ったとはいえ、買い置きのない方が0.9%、1日分と答えた方が4.7%いる。これはいざとなっても水だけは供給が確保されるし、なんとかしてもらえははずだ、という社会やコミュニティへの全幅の信頼の反映だとも考えられる。だとすると、備蓄量が増えたという全体の傾向は、自衛しないといざとなった際に誰も助けてくれないのではないかと、という不安の表れとも受け止められる。いざという際に自分が助かるだけでなく、もし困っている人がいたら分けてあげられる位に備蓄しよう、という風になって、地域の防災対応力が全体的に上がるのが一番だと思われる。

Q.知っている祝日・記念日は？（9択+知っているものはない）

◇「水の日」の認知率が上がらず。

ここ数年毎年調査している水や自然にかかわる祝日・記念日の認知。今年の結果は、「みどりの日（5月4日）」（74.7%）、「海の日（7月第3月曜日）」（78.2%）の両祝日の数値が例年同様に高く、施行5年目の「山の日（8月11日）」（56.6%）がそれに続き、祝日以外では「防災の日（9月1日）」が4割（40.0%）と、他の記念日を圧倒。以下はいずれも認知率一桁で変わらず、「水の日（8月1日）」（3.1%）も3%台のままでした。



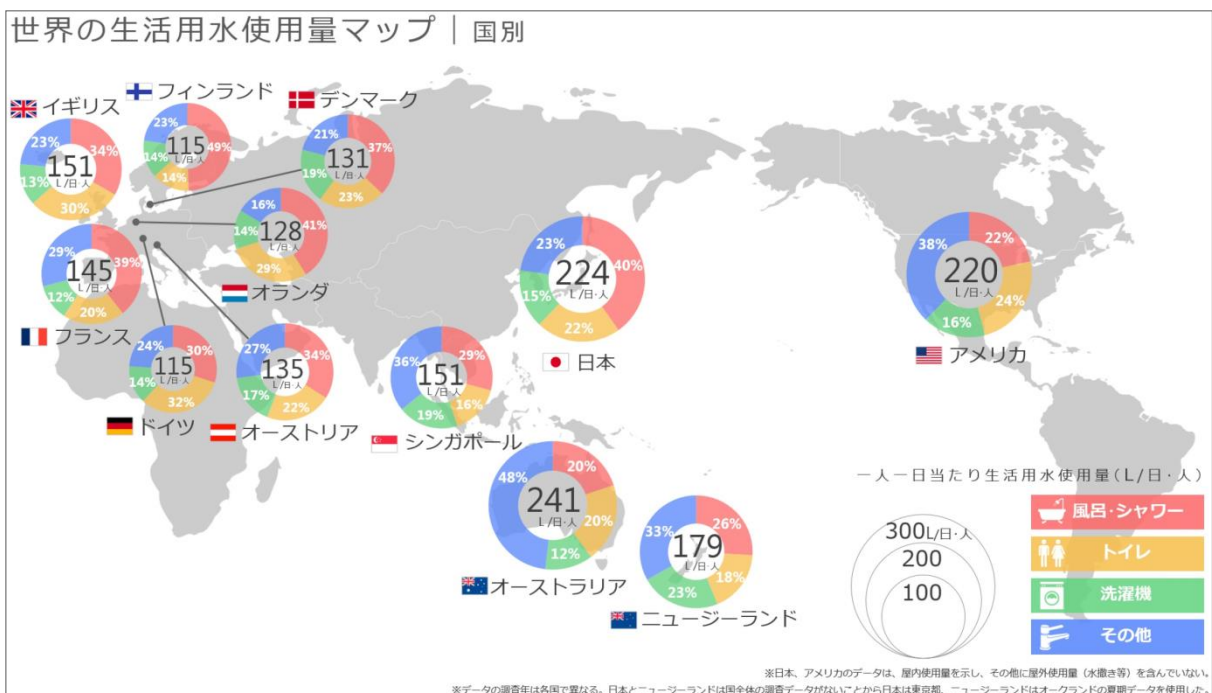
◎コラム「世界の水事情」 <1> 日本と海外における水の使用量

本調査では、例年「家庭で1日に使っていると思う水の量」について調査していますが、今回新たに、日本の1日に使っている水の量は外国と比較してどう思うかを、「外国より多いと思う」「外国と同じくらいだと思う」「外国より少ないと思う」の3択で尋ねたところ、69.5%と多数の人が外国より多いと答えていることが明らかになりました。

これは、蛇口をひねればそのまま飲むことができる水を、豊富に使うことができる日本で暮らしているからこそその意識なのでしょう。2018年の調査で実施した世界の水問題の認知に関する設問では、「世界では水道水をそのまま飲める国はごくわずか」に約7割の回答があったことから、日本の整備された水道インフラが世界の当たり前ではない（＝日本は水に恵まれた国）という共通認識はありそうですが、実際に日本の水の使用量は、外国と比較してどうなのでしょう。

公益財団法人水道技術研究センターの「世界の生活用水使用量マップ」によると、日本の1人1日あたりの使用量は224リットルで、オーストラリアの241リットルに次ぐ2番目。220リットルのアメリカまでが200リットルを超えています。ヨーロッパに目を向けると、一番多いイギリスで151リットル、ドイツは日本の約半分の115リットル。同じアジアのシンガポールは151リットルと、日本よりは欧州諸国に近いようです。なお、使用の内訳では、日本は「風呂・シャワー」の比率が高く、割合ではフィンランド、オランダを下回るものの、使用量としては最も多くなっています。

今回の本調査で節水の意識や行動をしていると回答した人が多かったことから、無駄遣いをしているという意識はなさそうですが、世界的に見ると日本の使用量は多いようです。



出典：水道技術研究センター(2017)「水道の国際比較に関する研究」

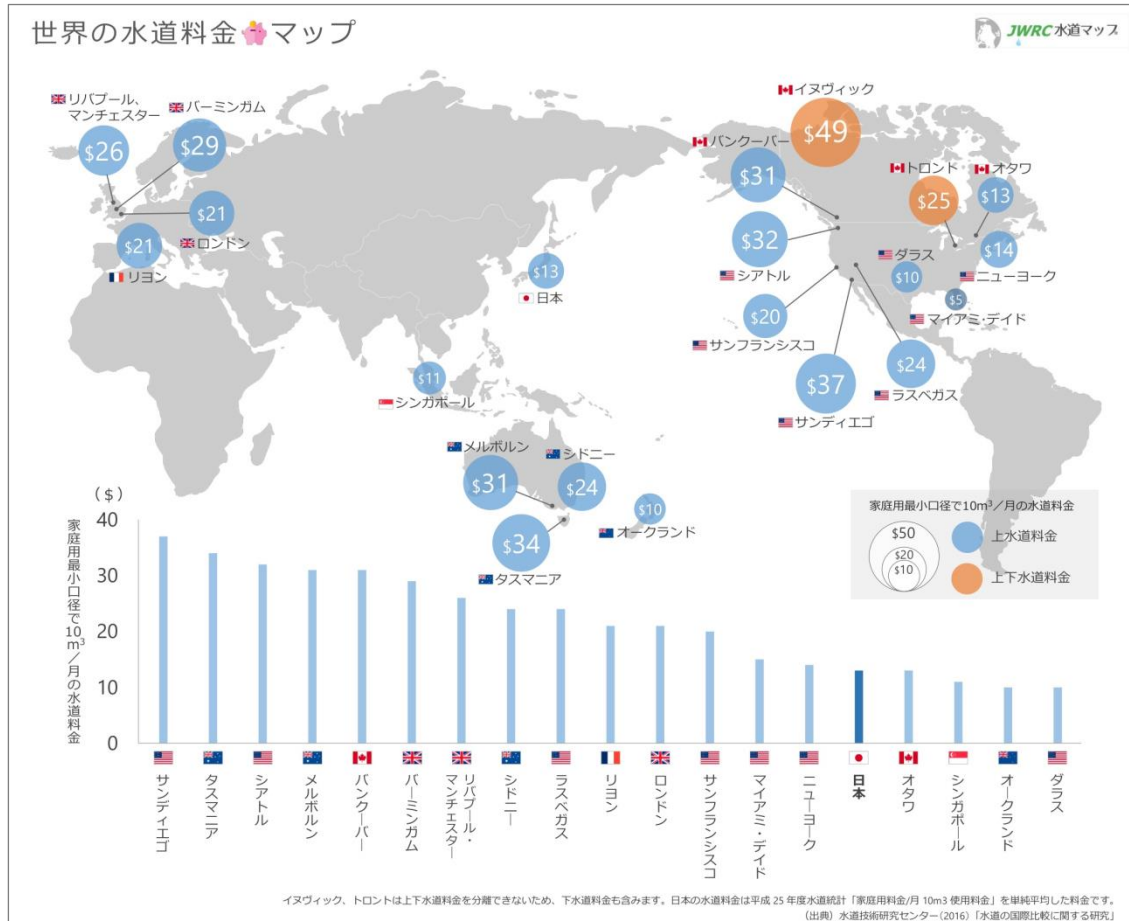
◎コラム「世界の水事情」 <2> 日本と海外の水道料金比較

本調査における「水道水への不満」は、「水道料金が高い」が常に上位となっており、今年も3人に1人以上が不満としてあげています。そして今回、「日本の水道料金は外国と比較してどう思うか」の設問（「高い」「同じくらい」「安い」の3択）では、「外国より高いと思う」に約4割（37.2%）の回答がありました。日本の水道料金は、本当に高いのでしょうか。

公益財団法人水道技術研究センターの「世界の水道料金マップ」を見ると、日本は13ドル（USドル換算）で、加・オタワ（13ドル）と同等、米・ニューヨーク（14ドル）やシンガポール（11ドル）とも大きくは違いませんが、英・リバプール、マンチェスター（26ドル）の半分、米・シアトル（32ドル）、加・バンクーバー（31ドル）、豪・メルボルン（31ドル）などと比べて4割程度でした。

日本の水道料金は、平均では13ドル（約1,500円）ですが、例えば札幌市1,452円、夕張市3,000円、東京都1,067円、大阪市1,045円、名古屋市797円、北九州市858円など地域格差があり、日本の水道が抱える課題の1つとなっています。

※料金は、家庭用最小口径あたり10m³/月使用の場合で試算。



沖 大幹（おき たいかん）
 東京大学 大学院工学系研究科 教授
 「ミツカン水の文化センター」アドバイザー

1964年東京生まれ。1993年博士（工学、東京大学）、1994年気象予報士。1989年東京大学助手、1995年同講師等を経て2006年より同教授。2016年より国連大学上級副学長、国際連合事務次長補を兼務。専門は水文学（すいもんがく）で、地球規模の水循環と世界の水資源に関する研究。書籍に『水の未来』（岩波新書、2016年）、『水危機 ほんとうの話』（新潮選書、2012年）など。生態学琵琶湖賞、日経地球環境技術賞、日本学士院学術奨励賞など表彰多数。水文学部門で日本人初のアメリカ地球物理学連合（AGU）フェロー（2014年）。



「ミツカン水の文化センター」と「水にかかわる生活意識調査」について

ミツカングループは1804年（文化元年）の創業以来、食酢の醸造を社業の中心としてきました。食酢の醸造に水は欠かせないものであり、ミツカングループは水の恩恵を受け、水によって育てられてきたといっても過言ではありません。それだけに、ミツカングループの水に対する関心は創業当時から一貫して高いものがありました。

1999年1月に、「水の文化」に関するさまざまな研究や情報交流活動を推進していく母体として「ミツカン水の文化センター」を設立しました。センターでは研究活動、機関誌「水の文化」の年3回の発行、ホームページでの情報提供、市民参加型イベント「発見！水の文化」の実施など、様々な活動を行っています。

「水にかかわる生活意識調査」も「ミツカン水の文化センター」の活動の一環として、センター設立前から実施しているもので、研究事業や、一般生活者の啓発活動の基礎資料として有効活用頂くことを目的としています。